

企画・審査委員長の講話



企画・審査委員長 金谷 年展

本日受賞された皆様、本当におめでとうございます。我々に感動と新しい知恵・知識を与えていただいた皆さんに、どのようにお礼をしていったらいいのかな、との気持ちでいっぱいでございます。ファイナリストに残っていただいた40組の方々に拍手をお願いしたいと思います。

今回は、本当にレベルが高く、年々レベルが上がっております。また、参加者の方々もバラエティーに富んでまいりました。今回受賞された小学生の皆さん、小学生初ということで、本当におめでとうございます。それから、年齢が高い方だと84歳レモンガスの会長様が昨日出られて、いまの想いを語られていました。年齢の小さい方から高齢の方まで、本当にこの低炭素杯は、参加の幅が広がってきています。それだけではなくて、今回は海外からも多くの方がプレゼンテーションに参加して頂き、海外での活動についても紹介していただきました。実際に社会の大きな変革をもたらすような可能性があり、既に大きなムーブメントを起しているような、そのような活動が賞をとりられています。

今回、審査員特別賞は、ソーシャル・イノベーション賞というネーミングにしました。我々は、イノベーションに3つの意味を込めました。

一つ目は「技術のイノベーション」です。今回グランプリを受賞した栃木農業高校の昨年の取組みはヨシズ作りでした。このヨシズをレモンガスが販売する連携が生れるほどの高い技術であり、製品としても安全・安心で経済的にも優れています。このようにマーケットインしていけるものが数多くあり、受賞対象となりました。

2つ目のイノベーションは「仕組みとしてのイノベーション」です。画期的な仕組みを生み出した活動、例えば福岡市環境局、新しい画期的なESCO型の取組みが全国に広まるのは素晴らしいことです。一条工務店のような民間でありながら、LCCA、ライフサイクルカーボンマイナス住宅という今考えられる最上級の住宅を普及する仕組みを作ったことも高い評価となりました。クールシェア事務局のように、ムーブメントとなったものを牽引した仕組みづくり、JR東日本、TerraMotorsも先駆的な取組みであり、まさにこれから広めていくことが出来れば、低炭素社会も大きく進展すると思います。

3つ目のイノベーションは「街づくり・村づくりなど、これからの地域作りのモデルとなる持続可能なモデル」です。地域資源を活用して、どうやって地域経済と連携して両立させていくのかについてのイノベーションが多数ありました。

その中で、実に3つともレベルの高いところにあったのが、栃木農業高校村おこしプロジェクト班であり、グランプリをとられたのです。審査員は昨年グランプリを探ったところは、昨年と少しでもかぶっている活動があれば、グランプリの対象からは外そうと話し合いました。しかし、なんとびっくりすることに、昨年の活動と何一つかぶらない、しかも、内容も切り口もまったく違う。麻がらで作った断熱材は非常に性能の高い製品であり、それを普及させるだけではなく、野生動物から農業を守る新しい付加価値のある麻の開発を行っており、今後のあるべき街づくり、村づくりのモデルを示した活動だと思えます。

審査員の中で、2連覇を指導した先生を見てみたいとの声が沢山ありました。小森先生、壇上へお願いします。

小森：実は遠いので帰る用意をしていたのですが、去年もびっくりして、今年もビッキリしております。私どもは農業高校であり、全国の農業高校はなかなか難しい現状があります。

私どもは里山が元気になることが低炭素社会の原点だと思っています。日本の里山が元気になって、そこで色々な環境が生まれて、都市との交流活動を続けていくことが重要だと思っています。それから、色々なアイデアが何で生まれるのかと言うと、余り肩を張らないで、自分たちの生徒たちがやっていることを、素直に発表したことが審査員の皆さんの評価につながったと思っています。

金谷：栃木農業高校は、プレゼンテーションも素晴らしいので、来年もここで賞をとりたい団体・企業が先生にコンサルタントを依頼することになるかもしれませんが、そのときは、よろしくをお願いします。本当におめでとうございます。

栃木農業高校の2連覇、無敵の感じがしますが、全国から栃木農業高校を撃破する活動が出てくることを期待しております。

今後とも、持続可能な地域を作るために頑張っていきたいと思えます。ありがとうございました。



▲栃木農業高校：小森先生のコメント

海外特別ゲストによるプレゼンテーション

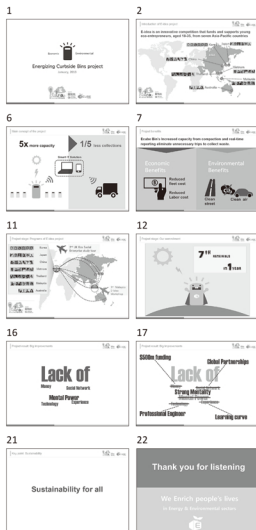
イ・スンジェ 氏

〔所属〕

国立ソウル大学 化学・生物エンジニアリング専攻

〔プロジェクト名〕

韓国 e-idea 受賞 Energizing Kerbside Bins



経済的かつ環境的なイキュレブのプロジェクトについて話し合うために韓国、ソウルからきました。青年ベンチャー、イキュレブのイ・スンジェです。

始めるに先立ち、過去1年間 私どものチームを支援してくれた e-idea プロジェクトについて説明させて頂きます。

e-idea プロジェクトは環境問題を解決する革新的なアイデアを選定し、具体化を支援するプログラムです。英政府の公式機関に相当する英国文化院と国際的な経営システム認証および教育機関 LRQA (ロイド認証院) が支援する e-idea プロジェクトでは昨年 2012 年に韓国、日本、ベトナム、インドネシア、オーストラリア、タイ、中国の 7 つのアジア諸国で、約 40 人に及ぶ環境・企業家らが選ばれ、各自のプロジェクトを進めました。

それではこれから私どものプロジェクトを説明させて頂こうと思います。このプロジェクトの開始は、ソウルの道ばたの、屑をひそめてしまうような現実から始まりました。写真からおわかりのように、今この瞬間にもソウル市内のあちこちでは、あふれるゴミによって通りが汚れています。一昨年に初めてこの光景に對し意識し始めた時、最初はただ公務員たちがゴミをこまめに片づけられれば解決される問題ではないのかと、簡単に考えていました。ところが、それが考えていた

よりも簡単でなかったのです。

ゴミをこまめに片づけるためには、嫌煙を噴き出す巨大なゴミ収集車が私たちの街の路上を何度も行き来しなければなりません。すなわち、きれいな路上にするためにはお金と環境対策が必要だということです。ここでジレンマが発生します。より良い環境のために環境を汚染しなければならない、皮肉な状況です。

この問題を解決するために、私どもは2種類の‘画期的’なテクノロジーを利用することに決めました。まさに再生可能エネルギーとIoT(Internet of things)と呼ばれる通信技術です。

路上のごみ箱があります。ここに常に日光を降り注ぐ太陽があります。降り注ぐ日光を太陽電池で受けてバッテリーを充電します。路上のごみ箱が息を吹き返す瞬間ですね。この貯蓄されたエネルギーでゴミを圧縮することになります。したがって他のごみ箱より5倍ほど多くのゴミを入れることができるようになります。

これだけではありません。圧縮されたゴミの残量状態をリアルタイムでサーバーへ転送することになります。使用者たちはどこでもPCとスマートフォンを通じてごみ箱の現況を把握することができるようになります。路上のゴミを除去するトラックが上記の情報を利用してゴミの回収過程を最適化することになります。

すなわち既存のごみ箱より5倍入れることができ、これをリアルタイムでモニタリングできるため、ゴミの収集回数を最大1/5まで減らすことができるようになります。

結果的には、太陽光圧縮ごみ箱を使うことになれば、さらに多くのゴミを入れることができ、不要なゴミ収集を減らすことができるようになります。

路上をきれいにして炭素排出量を減らすことができるだけでなく、同時にゴミ回収過程に必要なとされる車両費用や人件費まで抑えられるようになります。このように私どものプロジェクトが環境的なだけでなく、経済的だということがお分かりになるかと思えます。

このプロジェクトの始まりは、この一枚の絵 (No.8) に過ぎませんでした。初めは何も分らず簡単に考えていましたが、実際にこの考えを製品化するまでには数多くの難題を乗り越えなければなりません。

私どもイキュブレは20代青年4人のみで成り立つベンチャー企業であったため、全てのものが不足していました。資金、ネットワーク、技術力、技術力、経験、そしてが不足していたので、一つ一つ試行錯誤をしながら学んでいかなければならませんでした。時間とお金を経験に変えたということになりますね。

このような困難な状況の中、英国文化院で支援するプロジェクトに選抜され、資金と支援、そして助言を受け、大いなる力を得ました。

プロジェクト期間には、二度のグローバルコンファレンスがありました。最初はインドネシアでワークショップがあり、2回目には英国のロンドンとウエールズで社会的企業を見学しRio+20アジェンダ設定のための事前討論会に参加するプログラムでした。二度の行事で7ヶ国のさまざまな友人に会い、インスピレーションを与え合ったことがプロジェクト渦中にも疲れずに最後まで押し進めることができた原動力になったと思います。

結果的に、過去1年の間、私どもイキュブレの製品は計7回の補充および改善作業を経て最新モデルを作るに至りました。

この写真 (No.13) は最初のモデル事業のための注文数量を製作するために工場で一ヶ月間夜を明かした当時の写真です。大成功を取った人、あるいは失敗した人々をよくある経験談のように、何日間も家に帰らず、工場の床や車内、サウナ、宿で丸まって眠り、



生産に没頭したことを思い出します。もちろん私どもはまだそれほど成功も、失敗もしていません。ひとまず今は笑って話せることができよかったです。

これがまさに一ヶ月間の工場作業後にできた製品です (No.14)。現在ソウル市内の4つの大学で示範的に運営されていて、今でも絶え間ない改善が行われています。

これはモニタリングソリューション (No.15) です。日本での発表のために日本語バージョンも準備してみました。このように地図上でごみ箱の位置と容量をチェックできます。

私もイキュブレの立ち上げ時、資金、ネットワーク、精神力、技術力、経験全てのもが不足していたと申し上げましたが、一年が過ぎた、この時点で多くのことが変わりました。大量の資金を誘致し、グローバルネットワークを持つことになり、専門エンジニアを迎え入れ、研究に研究を重ね、多くの経験を積み上げています。何よりも、相変わらず困難の多い今の状況に対処していける精神力をもてるようになりました。

これは昨年、韓国の大統領府で大統領に試演を行った時のものです。私どもの製品に対して良い評価をして下さいました。

これは私どものチームの写真 (No.19) です。数日前デザイナーの友人1人が合流して9人になりました。一年間に人数が2倍以上増えたので、今のところは上手くいっているということでしょう。

私どもの路上のごみ箱に命を吹き込む次のプロジェクト目標は、プロジェクトの世界化です。韓国を始め、オーストラリアや中東、ヨーロッパなど世界各地に広がっていきという夢を持っています。日本の路上でも、イキュブレの太陽光ごみ箱を見られたらいいですね。

プロジェクト紹介を終え、最後に申し上げたいのは皆のための持続可能性についての話です。2つあるのですが、一つは‘社会’の持続可能性です。以前は持続可能性といえは何か地球の‘きれいな環境’と関連した概念だと考えていました。

英国見学行き、持続可能性が単純に環境保護だけを意味するのではなく、飢餓、貧富格差など、社会全体の持続可能性まで含まなければならないということ学ぶようになりました。

このように拡張された概念を、もう少し多くの人々にわかってもらうことができると思っています。

よく、環境と関連した活動をする際‘良い意図’に焦点を合わせがちですが、実際に活動を行っていくと、数多くの現実的な要因の前で、プロジェクトが挫折するケースをたくさん見えました。結局、良い意図を越え、プロジェクト自体が持続可能になることを現実的に考えることが必要だと思います。

ご質問のある方は sJlee@ecubelabs.com にメールをお送りください。ご清聴いただき、ありがとうございます。

(日本語通訳: 小林真美)

低炭素杯 2013

団体間交流会

日時 ◆ 2013年2月16日(土) 18:30～20:00

会場 ◆ 香港飲茶楼 ル・パルク(東京ビッグサイト東展示棟)



2月16日午後6時半～午後8時、香港飲茶楼ル・パルク(東京ビッグサイト東展示ホール)で団体間交流会を開催しました。出場団体、共催等団体及び実行委員など約200名が参加し、櫻田彩子さんの司会により盛大に開催されました。開会の挨拶は、低炭素杯2013実行委員会副委員長の川北秀人さん(IIHOE(人と組織と地球のための国際研究所)代表)、乾杯の音頭は実行委員の長谷川公一さん(一般社団法人地球温暖化防止全国ネット理事長)が行いました。その後、意見交換・交流が行われ「交流会がとても役に立った」などの感想が寄せられました。

なお、出場団体や各地域センターから多くの各種の地域名産品、キリン株式会社からビールなどの飲み物をご提供いただきました。



寄付をお寄せいただいた皆さま

低炭素杯 2013 ファイナリスト団体から

奈良市地球温暖化対策地域協議会(社会実験ワーキンググループ)様 / 特定非営利活動法人 さばえNPOサポート様 / 株式会社ナチュラルファームシティ 農園ホテル様 / 京都府長岡京市立神足小学校様 / 岐阜市地球温暖化対策推進委員会様 / ソーラーバイクレース大会実行委員会様 / エコワークス株式会社様 / 京都炭素貯留運営委員会様 / 鹿児島大学 Sustainable Campus Project (SCP) / JAグリーン鹿児島様 / 株式会社 一条工務店様

地域地球温暖化防止活動推進センターの方々から

青森県センター様 / 秋田県センター様 / 富山県センター様 / 熊本県センター様 / 大分県センター様 / 鹿児島県センター様 / 和歌山県センター様 / 静岡県センター様 / 京都府センター様 / 神奈川県センター様 / 宮崎県センター様 / 秋田市センター様 / 奈良県センター様

その他の方々から

キリン株式会社様
 木原木材店(北はりま小径木加工センター)様